



慶應義塾大学ビジネス・スクール

株式会社 広島バイオメディカル

5

2008年9月、広島大学発のベンチャー企業「広島バイオメディカル」の会長の松田治男（広島大学大学院生物圈科学研究科教授）と社長の豊浦雅義は、翌月横浜で行われる展示会バイオジャパン2008の準備のため、打ち合わせを行っていた。この展示会には、展示スペースに加えてビジネスパートナリングという場が提供されており、参加企業にとっては、技術PRとともに、新規顧客や事業提携相手を探索する良い機会となっている。広島バイオメディカルは、つい先日、創薬を手がける大手企業からの受注に成功したところであり、今度の展示会の準備にも自然と力が入っていた。

10

ニワトリを中心とする鳥類免疫研究に30年来取り組んできた松田にとって、広島バイオメディカルの事業が軌道にのることは、長年の研究成果の実用化・産業化に成功することでもある。実際、2001年以降、松田を中心とする研究グループは、抗体作製を始め複数の実用化研究プロジェクトに取り組み、着実に成果を上げてきた。そして、産業界に対する提案として「第6回バイオビジネスコンペJAPAN」に応募し、そのビジネスプランは、最優秀賞に輝いた。さらに、受賞の1年後、2007年4月には広島バイオメディカルを設立し、松田は豊浦とともに、ビジネスプランの実現へ向けて、最初の一歩を踏み出した。

15

会社設立まで順調な道のりを歩んできたようにみえるが、研究一筋の松田は、初めから自ら起業しようと考えていたわけではなかった。研究としては成果をあげているにもかかわらず、実用化という観点では日の目を見ない状況に長らく我慢せざるを得なかった。会社立ち上げ時の事業は、すぐに商用化が可能だった抗体作製事業から始めたものの、ビジネスプランの実現には、さらなる研究開発が必要である。現在の自社資源で製造や販売のすべてを手がけることは難しく、

25

本ケースは、公表資料ならびに関係者へのインタビューを基にクラス討議の基礎資料として作成したものであり、経営上の適切もしくは不適切な状況処理を例示しようとするものではない。本ケースは 内田国克、大場利治、田邊佑介、藤岡 均、松本健一、山下真吾が作成し、慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授 中村洋がとりまとめた。本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉4丁目1番1号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

30

(2009年9月作成)